

道具が年を取ることの意味

平 良 直

はじめに

昨年の紀要において、筆者は農具の箕が祭礼や儀礼に用いられることを取り上げ、伝統的な農具として普段使用されている道具が「呪具」として用いられることの意味を考察した。箕は他の農具と同様に労働の道具であると同時に、その道具が持つ特性（創造・生み出す力・野性的なものの人間化など）ゆえに、日常の生活世界と、人間が立ち入ることができない神・精霊・魂・霊などの異界、いわば「向こう側」の世界と交渉する通路・境界を象徴的に作り出す道具（「呪具」）としても用いられてきた。その儀礼の象徴を通して把握できることは、こちら側の世界は、向こう側の世界に働きかけるなかで、向こう側の世界によって形作られているということである。箕という道具の特性の力をかりてそのことが表現されているというのが箕の「呪具」性をめぐる考察で得られた理解であった。⁽¹⁾

箕の「呪具」的使用が興味深いのは、道具と人間、さらに広くとらえるとモノと人間、そして向こう側の世界、

すなわち神霊・魂・魔・霊などの世界も含めた人・モノ・霊威の分ちがたい関係を浮かび上がらせると同時に、他の道具やモノも同様の連続性があることを想起させる点にある。儀礼を通じて表現されるその連続は、人とモノの連続、モノと霊威の同一化、そしてモノを媒介としつつ、人と霊威との連続性、さらにはその同一性を暗示している。日本の民俗宗教的伝統では人がカミとなることがしばしば認められるが、この伝統の基礎には人とモノの連続性があるのではないかと考えられる。

民俗学が収集した「俗信」の諸事例は、庶民や農に関わる人によつて素朴な言葉で語られ、生活の言葉で説明されるが、よくよくその意味を掘り下げていくと、深い意味世界の広がりがあることに気づかされる。人間を取り囲む環境・建造物・生活の道具などの自然物やモノと人間との一貫した連続性が、儀礼や祭礼、生活のなかでの語りを通じてそれが表現されてきたといえる。

人とモノとの連続性が、人とカミとの連続性の基礎にあるという大胆な理解のように思えるかもしれないが、日本の民俗伝統論においてしばしば論じられてきたように、モノに霊威が宿ることは頻繁に見いだされるのであり、むしろ民俗の世界はそれで成り立っているといっても過言ではない。物・モノ・者（さらにモノノケ・鬼など）が連続する日本の伝統からすれば、人とカミの連続性の基礎に人・モノ・霊威が包摂された次元を想定することはそれほど奇異な理解ではない。

このような日本の民俗伝承にみられる人とモノの関係性あるいは連続性は、日本人の心性や精神性、また宗教性を色濃く特徴づけてきた要素であるといえる。この心性は現在でも失われてはいないだろう。たとえば、日本人のもののづくりの基層に「魂をこめる」という精神文化があるといわれる。これを否定する人は少ないであろう。むろん、現代の大量生産の時代においては、製造されたものの自体は日々消費される商品であり、現代の消費社会

のリアリティを超えるものではない。しかし、その製造用の道具である工場の機器の製作はおそらく日本的ものづくりの文脈で魂が込められていると思われる。また、日本人の心性は、大量製造されたモノであっても、モノに霊威が宿るとして、それを処分する際に、さまざまに供養祭が執り行われることがある。⁽²⁾このことからすると、モノに魂をこめる、という言葉は単なるアナロジーではないといえるだろう。

このように人とモノの連続性が日本の伝統に顕著に認められるが、この伝統はなにも日本だけでなく、人類学の報告や、多くの民族誌から知ることができる。また、キリスト教のような一神教において、プロテスタントの厳しい偶像崇拜への禁忌が厳格化されるまでは聖性と物質性は分かちがたいものであったという事実がある。⁽³⁾このようなことからすると、モノが聖性を顕示し、人がその聖性とながろうとするあり方は、人とモノの関係の基礎をなしているともいえる。

モノと人の関係性、連続性を探求することは近年、人類学や宗教学などの領域に限らず、テクノロジーの発達がますます高まるなか、AIや人体工学の分野でも重要な主題となっている。あらためて述べるまでもないが、人間とは何かを知ろうとする場合、その身体性、物質性・モノ性を抜きにすることはできない。モノと人の関係性・連続性を様々な視角から探求することはますます重要となってきたのである。本稿では、その人とモノの関係にある民俗の事例から考察を試みたいと考えている。

箕の儀礼的使用と同様に、筆者が人とモノの関係性を読み解く手がかりになると考えているもう一つの民俗伝統の事例とは、小正月の年中行事のひとつである「道具の年取り」と呼ばれるものである。この儀礼では、道具が人と同じように新しい年が明けるとあたかも道具が生きているように年を取るのである。「道具の年取り」は民俗誌の説明ではごく手短に紹介され、小正月の諸儀礼のひとつとして小さく触れられるのが通例であり、この

事例の詳細を取り上げた報告は少ないが、筆者は、ある種「素朴な」この事例は、小正月の種々の予祝儀礼と同様に、日本の民俗伝統における人・モノ・神霊の関係や、さらに人・モノ・環境（自然）・神霊（魂、祖霊）・道具・生産・創造といった、事物と人の連続性、人の営み（生産・創造）と神霊との関係を読み解きわめて重要な手がかりとなるのではないかと考えている。

「道具が年を取る」という表現は、日本人であればごく自然に受け入れられる道具への感謝や思い入れ、新年に、その道具を用いた生産が実りあるようにと祈願し、モノを大切にすることを表現する生活語のようにも思われる。このような心意の現れとしてそれらの説明を受け入れたうえで、さらに真剣にそのことの意味を考察することが本稿の中心的な課題である。そのためには、どのような視点が必要なのだろうか。モノに対する感謝や祈りの心意以上の意味を見いだすにはどのような把握が必要なのだろうか。

道具が人と同じように年を取るというこの儀礼の意味を読み解こうとして「霊威が宿る」「アニミズム」などの言葉を当てはめて理解しようとする、その儀礼のなかに秘められた意味を取りこぼしているように思われる。アニミズムという言葉は、諸民族の同様の現象を把握する言葉であり、人間の普遍的な宗教的心意を表現したものであるが、アニミズムという語は注意深く使用しなければならない。「感謝」や「祈願」の心意表現に落とし込んで理解するのときほど変わらない還元的な語になってしまう場合があるからである。

もつとも、筆者は「アニミズム」という把握を否定的にとらえてはいない。同時に、道具が年を取ることに ついての説明で用いられる「感謝」や「祈願」ということが示す人間の心意がもつ奥行きも理解しているつもりである。アニミズムという語は、E・タイラーが単に宗教の進化論的な図式を説明するためにこの言葉を用いたのではなく、人間の宗教的な本性として描き出そうとしていたことが指摘され、タイラーのアニミズム論にあるデ

カルト的な二元論的な人とモノの断絶を取り払ったうえで、積極的に用いられるようになって⁽⁴⁾いる。確かに日本の民俗的世界はアニミズムに満ちているといえるが、重要なことは、そのアニミズムを通して生きられている意味世界を深く読み取ることであり、アニミズムという言葉に還元するだけでは、その意味世界の理解は不十分なものとなってしまふ。筆者自身が常に気を付けなければならないと思っていることである。

筆者も、アニミズム的な現象について語るとき「霊威が宿る」などの言葉を使用したりする。その折に気を付けたいたのは、物質としての道具（モノ）があたかも「命を有するがごときモノ」として受け止められている、と信じられている」と説明がなされたとたんに、現代人には「理解不能な、不合理で非科学的で迷信の類ではあるが」といったもう一つの隠れた認識を表明するだけになっていないか留意する必要があるということである。

民俗の世界で見いだされる人とモノの関係性や連続性は、おそらく人が生活世界のなかでモノとつながりながら生きている全体的なあり方に対する言語化される以前の直感や体験なのだともいえよう。それを理解しようとするには、場合によつてはどうしても「アニミズム」や「霊威」といった言語化は避けられないが、その体験や感覚へと迫りうるような意味の探求こそが重要だと考える。むしろ、意味の探求もまた感覚の言語化ということが不可避であるが、可能な限り、人・モノ・霊威の連続性への理解が私たちの身体的な感覚を媒介としながら探求しなおされる必要があるだろうと考えている。⁽⁵⁾

本稿で取り上げる道具の年取りの儀礼は少なくなつたとはいえ現在でも行われている。現代に生きる人々が科学的思考と無縁な訳もなく、道具は物理的な道具であることを理解している。おそらく、古くから農耕に関わってきた民俗的伝統に生きてきた人々も、道具が道具以上の何ものでもないという理解はあつただろう。それでもこの儀礼が毎年行われ、道具としてのモノが年を取ることは何を意味するのか。この問いへの回答は容易ではな

いが、この儀礼に見いだされる、人とモノ、人と道具との関係について掘り下げて考察する必要があると考えている。

考察はまず、道具の年取りについて概要を示したうえで、その儀礼が行われる文脈のなかから、人と道具としてのモノとの関係について見ていくことにしたい。

一、道具の年取り——その分布

「道具の年取り」は、小正月の一連の諸儀礼のひとつである。どの地域でも見られるというものではないが、広く点在する形で行われている。これまでに蓄積された膨大な民俗誌のすべてにあたることは困難であるので、文化庁が昭和四〇年代に行った調査をまとめた『日本民俗地図Ⅱ 年中行事²』の報告を基に見てみると、関東・東北をはじめ、信州・関西・中国・九州などで伝承され、小正月の年中行事として行われていることがわかる。⁽⁶⁾

同報告書は書名にあるように、全国の民俗伝承の分布を地図上に一覧化したものであるが、作成された分布地図に記載されていないケースもあるので、調査記録の解説の記載部分を含めて、道具の年取りの記述を拾い出してみると、すべての県にあるわけではないが、全国でその儀礼が行われていることがわかる。北からその分布をみると、岩手県・秋田県・山形県・新潟県・福島県・埼玉県・群馬県・山梨県・愛知県・高知県・鹿児島県などの小正月の儀礼の一つとして記載されている。各県の調査地域に満遍なくあるわけではなく、県によっては一か所のみ記載である場合もある。道具の年取りが存在したり、しなかったりするのはその儀礼が他の儀礼に代替される形で行われ、年末から新年の家屋や屋敷の全体を聖化する諸儀礼のなかに含まれる形で消失していった地域